

CHAPTER FIVE

章5

まばらな街路灯のライトが、しかし明るい、深化影に対しては無効だった。店の窓にガラスパネルは、ミラーは、彼がやっと自分自身として認識ゆがんだ反射が戻って投げた。そのぼやけた顔と落ち着き足取りは彼に彼が守られたことをひそかに感覚を与えた。ペトロフは時折キャリッジはそのようなとんでもない時間で無謀なスピードで狭い脇道を操縦、過去運転したとき一時的に気を取られて、眉をひそめた。

新しいブロックに通りを横切って、彼が見ている目のペアに気づいた。それらに怯えたためらい、無言の警告はあった。手は窓のシャッターを引っ張って達した。ペトロフはその後、家の蝋燭、沈黙の送風ソフト続い安全パネル、控えめな口論のくぐもっさきやき、ボルト、摺動板を慎重にパツを聞いた。彼は早歩きを神経質にアンブルに減速して、一緒にさまよっとしてガラス板の次の行は、同じ話をした。風怒つ遠吠えは彼のペースにマッチした不吉なきしみを運んだ。彼は当時のきしみ、石畳の交差点、きしみで停止し、さらに歩いた、一時停止しています。彼が停止したときに、ノイズをしました。彼の心は不要な可能性を暴走。でこぼこの彼の呼吸、不安と胃もたれは、彼が苦心のペースで変わった。

ムーンライトはさびたスイングを前後にきしむされた腐った柳の木の枝を通して輝いていた。不気味な輝きは、トランク、ペトロフを見て目に隙間を通して浸透。彼は突風に渦巻く、生い茂ったツルの長い蔓にうっとりしました。それから彼は微笑んで、それはあなたの想像の中ですべてです。

柳に近づいて、ペトロフはさびれた通りをさらに擦れる音が聞こえてきた。彼はトランクの陰に隠れたが、より多くの音や雑音の後に彼は彼自身を覗いて見て下さいすることを許可。シルエットは道路の側をオフに墜落したキャリッジを囲んだ。

暗闇の中で、ペトロフはガイドフェンスの近くに歩いて行った。彼の手は分裂木の板を垂れ粘性液体をかすめた。雪の上で輝く道に続いて、彼は猫背マスに囲まれ負傷した姿を見ました。男は身もだえするように足が痙攣けいれんで、空気が息を呑んだ。男は暗い数字でひっかき、逃げるための必死の入札をしたときにペトロフは、別の一步を踏み出すに挑んだ。彼の顔は、サイレント悲鳴に傷つけ、広い恐怖に目が、彼は地面に落ちる前にぐったりペトロフを見ました。ペトロフは彼の喉から叫びを消音、彼の口をカップ。彼が後方に押されたように彼のブーツのクランチを息苦しい、雪の上を歩いている彼は、彼のさきやきをバック飲み込んだ。静寂を乱すことは、彼が後悔するために生きるのではないでしょう間違いでしょう。彼は十分得ることが出来る前に、吠え声が彼のトラックで彼を急停車した。

"野蛮人！あなたは私にそれらをもたらすことになっていた！あなたが作った混乱を見て！"彼らは迫り来る姿でひざまずき。彼らはペトロフの呼吸を聞いているかのように埋め立て静寂の中で、それがあった。彼らの視線がペトロフに落ち着いたように、すべての目が悪意で輝いた。

彼の人間の反射神経は、彼がボルトで固定せざるを得ない。ペトロフは荒れた手が彼をつかんで遙か前に取得できませんでした。一陣の涼風の後、彼は凍った湖のそばに自分自身を発見、町の明かりを遠くから見ると点滅しました。誰でも彼は地面に固定された保持すると、速い人間はあまりにも迅速な旅行でした。見かけのリーダーは彼の足が雪の上にマントの男を押し下げると立っていた奇妙な生き物の群れが彼を囲んだ。

"O-otče naš, sůščij na nebesách," 数珠を通して弄男は彼のベルトで縛った。彼は自由な身をくねらせ、彼の試みで、ロシア正教の祈りの最初の詩を口に始めた。彼はペトロフが指す、"彼を取りなさい！私は何でもやります、ちょうど私を傷つけないでください！"自己保存の哀れなショーで楽しま、リーダーはペトロフの捕獲に行く信号を与えた。"非常によく、彼が最初に行く。"

不吉な笑い声が牙のブルートのキラリと光るセットを露呈した。彼は襟をヤンクと深いペトロフの首に彼の歯を沈めた。攻撃者は恐怖で息を呑んだ、とうなる離れて跳躍し、彼の被害者は普通の男だったん実現。

激怒ペトロフは何ヶ月も強制過去拘束を破って、噛み跡が彼のタッチの下で癒す感じ。人間の服が Caelumair のローブを明らかに捨てられた、Zedryd のサファイアの目が敵意を切り開いた。

彼は加害者の顔にズームイン。クリーチャーは、ひどい臭いを発した。血はその場で凍りついたかのように彼の青ざめた顔色は灰色と青の静脈と縞。それは疑い強いとアジャイル、まだ不滅であるには余りにも弱かった。

彼の変換の後に続いたパニックは、すべてがリーダーがラットのように別々の方向に疾走していました。彼らは迅速でしたが、彼らの新たな捕食者はほとんど遍在するよう見えた。Zedryd最も近い逃げる生き物で突進。慈悲のためにその嘆願を無視して、彼は彼の背中から背骨をねじりとリーダーに向かって死体を蹴った。死体は蛆のわいたプール内で爆発した。

体の部分は、過去の高速化として、リーダーはスプラッタと地面に上陸、大虐殺の中心に反抗的に立っていた。Zedrydは重い拳で頭蓋骨を粉碎し、素手で、彼の右にペアを斬首。

大虐殺を目撃しCaelumairsとEmpyreansがZedrydの荒いうなり声でオフに警告された、"一緒に移動！彼らは離れて破線のように、これはあなたのビジネスのどれもありません...あなたはそれになりたいしない限り、"彼の目は威嚇の脅威に燃え上がった。

断片化された骨の音が助けを叫ぶ僧侶を持っていた。彼は悪質な捕食者と目に見えない精神異常殺人者のなすがままに立っている。

彼の部隊は、間引きされ、リーダーはZedrydの精査視線を乗。"あなたは誰ですか？" Zedrydは彼の首の下で呼吸立ったときの言葉がやっと彼の舌と別れました。

"あなたは何ですか？" Caelumairは言葉を怒鳴った。

恐怖からの回復は、彼は逃げるようになった。リーダーは彼の追手を逃れるためにハイとローの跳躍、木に方向転換。彼はターンを取ったか、方向を変えた時に、Zedrydは彼を勉強し、一步一步、すべての飛躍、あらゆる束縛に彼のそばにあった。リーダーは、高い石の壁に突進しかしZedrydは彼がフィールド全体を横切って後方に飛んで送信するように彼の首をつかんだ。彼は凍った湖に到達するまで彼の体が木々の間にパスをクリアしたように彼はうめいた。彼の足が氷を削ることができる前に、Zedrydは胸で彼をつかんで脱出する蛆虫のわいた雪の中をウェーディングた恐怖僧侶の近くに彼を放った。

"あなたは私を傷つけることはできません！"リーダーをあざけた。

彼の頭は片側に傾けて、Caelumairが彼に向かって歩いた、"私はするつもりではなかった。"彼はリーダーの額に手のひらを置いた。農業トラフ、古い家族の写真、不作、飢饉、もうかる仕事の申し出を持つ神秘的な藩主、城に入る農民、夕暮れ悲鳴、明るい光が彼の心を焼け付くような長い埋もれた思い出のシリーズに続いて、フラッシュ夜の深さ、憤慨した村人、炎の城の暴徒に配置される骨は、棺は彼が彼のマスターの脱出、一口で永遠の約束が付いているギフト用バイアル用台車にロード。

"イナフ！"リーダーが泣いて、Zedrydの手から自分自身を解放するために無駄にギョッ。

"私はもうそれを取ることができない！"

飽くことを知らない欲望は、彼自身の子供の泣き叫ぶ声は、彼の潜在意識を刺したり、嘆願は彼の非常に自身の喉から来たためにそう彼は思った。

Zedryd は、驚いたけど、ストックに推移しました。"私はまだあなたが何であるかを知らないと私は僧侶で何をしたらよいかわからないが、私はない人に行くことができます。"